

わたしこそが復活です

〔聖書〕 ヨハネによる福音書 11 章 21～28 節、32～44 節

マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいまして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。

マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか」と言う者もいた。イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

〔序〕 ウソに慣れてしまう私たち

このような言い方はとてもネガティブに、否定的に聞こえてしまうと思いますが、私たちはいつしか「ウソ」に慣れっこになってしまっているように思います。先週月曜日、私はたまたま家にいて国会中継を眺めていたのですが、あの「桜を見る会」

のホテルでの前夜祭をめぐる野党議員と総理大臣のやり取りは、本当にガッカリさせるものでした。何がと言いますと、言葉が全く死んでいるのです。特に首相の答弁が、私にはまともに答えることから逃げているようにしか聞こえせんし、またそのために**辻褄合せ**に翻弄される人も出てくるという愚かしい循環が表れているような気がします。もしかするとそんな光景はもう見飽きたという感じを持つかも知れません。私たちはどこかで思ってしまうのです。社会なんてそんなもの、それが現実だ、ウソであっても、結局は進んでしまう、諦めるしかないのではないかと。

しかし、それは悲しいことです。真実が覆い隠されることを良しとし、取りあえず**“その場しのぎ”の言葉の弄び**の中で事が前へと進行して行ってしまう。これはとても健康的なこととは言えないと思います。**病んでいる**と思います。そしてこの病気は私たちの心をも蝕むと思うのです。それは、どこか、この社会、或いは人と人との関係に対しても**“損得”**で関わっていればよいのだ、真剣に関わっても賢くない」という思いの中に私たちを誘い込んでしまうように思います。それはやるせないと言いますか、心の深い所に**「絶望感」を孕ませるもの**ではないかと思います。私は、それは**「信じる」とか「信じあう」ということの対極**にあるような気がしています。

[1] 「信じる」ことへの招き

聖書は、「**信じる**」ということをし、その第1ページから、最後の1ページに至るまで、何よりも大事なこととして捉えていると思います。聖書は私たちに、“信じて**も**信じなくてもいい世界”のことを言っているのではなく、**最も人格的なことである「信じる」ことへと招いている**のです。

今日の箇所でも主イエス様は、私たちにこのように語られています。—「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(11:25)

—「信じられない」ものに溢れた世界で、また「信じるに値しない」と思ってしまう世界の中で、主イエス様は、私たちに向かって**「あなたはこのことを信じるか」と**真正面から問うているのです。今日私たちは、この礼拝を終える時、「**主よ、信じます。あなたを信じます**」との信仰を抱き、いえ、信仰を＜与えられて＞帰ることが出来たなら、私たちがこの礼拝に來た意味がそこで全うされるのだと思います。

[2] 「死」は自然のことではない

ここには**一人の人間の「死」**が描かれています。**ラザロ**という、恐らくまだ若い男性が何の病気か分かりませんが死んでしまったというのです。そして先ほど読んで頂いた通りの物語が展開される訳です。これはまことに**驚くべき物語**です。人間にとって絶対的である、「死」の闇の中に消えて行ってしまったとしか思えない存在が、

「命」の中に再び姿を現した物語です。

「死」、—それを避けることが出来ないことは誰でも頭で分かっています。「死」に繋がっているレールの上に乗っている私たちです。しかし、大きな病気でもしない限り、そのレールはまだ暫らくは続くだろうと漠然と思っている私たちだと思います。また、「死」に対して、私たちはどこか“聞き分けの良い優等生”のようであるかも知れません。どういう意味かという、死に対して＜従順＞なのです。人間もまた、植物や葉っぱが枯れていくように必ず終わりがあるのだ、そんなに深刻なことではない、それは人間の「生」の一部なのだから、飄々と受け止めて行けば良いのだと考えることは、キリスト者であってもあり得ると思います。それは、慰めと言えば慰めと言えるかも知れません。しかし、それはもしかしたら“一時しのぎの慰め”なのではないでしょうか。

聖書は、人間の「死」を、「自然」のこととは捉えていないのです。その意味で、安易な慰めを拒否していると言えます。「死」は、「自然」なことではなく、「不自然」なことなのです。創世記によれば、人間は、神様との関係を自分から捨ててしまいました。アダムとエヴァの物語です。それまでは人間は「死」というものを知らなかったのです。しかし、自らが神様の被造物であることを超えて、自らが神のようになろうとした時、神様は人間に「死」を与えたのです。つまり、「死」とは、人間は神様の前に滅びるというしるしであるのです。これは、冷徹な事柄です。しかし、聖書はまずそのことを明確に私たちに告げます。使徒パウロも言いました。「罪が支払う報酬は死です」(ローマ 6:23)と。

[3] 「死の現実」の只中にやって来られる主イエス

今日のヨハネによる福音書の 11 章は、この福音書の丁度真ん中にあるだけでなく、聖書が語る福音の頂点だとも言われます。只今引用したローマの信徒への手紙 6:23 の後半の言葉を実現するための物語がここにあると言ってよいと思います。それは「罪が支払う報酬は死です」のあとに、パウロがこのように語っていることです。—「しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです」。

このヨハネ 11 章で記されていることは、主イエスが「死の現実」の中、具体的には、しばしばお訪ねになったベタニヤ村に暮らすマルタとマリアの、多分弟であるラザロという愛する者が病気になり、やがて死んで既に墓に納められていてもう四日も経ち死臭さえ漂い始めているという、人間がどうすることもできない只中にやって来られたということです。人間が最も無力さ、虚しさに打ちのめされる時です。

その時、ここまで足を運ばれた主イエスは、直ちにこの死者を生き返らせたかと

いうとそうではありませんでした。32 節から少し読んでみますとこうあります。

「マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。」

イエス様は、愛する者の死を深く悲しまれるお方です。それはヘブライ人への手紙にも書かれてある通りです。「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではない」(4:15)。彼は、神の独り子であります、私たちの涙を知り、自らも涙を流すような「まことの人」になって下さったお方です。

そしてそれだけではなく、今の所でも「心に憤りを覚え、興奮して」とあります。38 節にも「イエスは、再び心に憤りを覚えて墓に來られた」とあります。彼の心は激し思いに動かされていたのです。「心に憤りを覚え」。何に対してでしょうか。一つの解釈は、主は人々の不信仰に憤った、という捉え方があります。もしかしたらそうなのかも知れませんが、私はここでは、「再び憤りを覚えて」とありますけれども、人々の不信仰に対し自分を制することが出来ない思いを抱いたというよりは、先ほどの「涙」と合わせて考えると、主は、「死」の、人間に対して容赦ない悲しみをもたらすその悪魔的力に対して「憤った」のではないのでしょうか。…イエス様は、「死」に対して“あきらめの良い優等生”のようではなかったのです。そうではなく、その「死」に挑む方として、ここにいらっしゃるのではないのでしょうか。

「愛する者の死」を経験されたことがある方も少なくないでしょう。こういう言い方は良くないと思いますが、私たちは、遠い方の死であるなら、ああ気の毒だなあと思っても、心が痛くなること、空しくなることはあまりないと思います。けれども、身近な、愛する者の死というのは、捉え切れないのです。私も先日の 14 日で、**妹を交通事故で失って 1 年が経ちました**。私は思ったのですが、「**喪失体験**」というのは、本当に「喪失」の体験なのです。ただ肉親がいなくなったということもですが、それは、自分の中の何かが失われる経験でもあるのですね。「死」というものは恐ろしいものです。**得体が知れないものです。不可解で、不条理だ**と思ってしまう。それはやはり聖書が「死は、人間の、神様への罪の結果だ」と言うように、私たちの手が及ばない、深い淵の中にある事柄なのだと思わざるを得ません。

しかし、11 章 15 節では「**さあ、彼のところに行こう**」と言い、38 節以下で実際にそのラザロの遺体が納められた**墓の現場**に足を運ばれ、その岩の墓を塞いでいる「**石**」を取り除けるように命じるお方がここにおられます！

普通、葬儀は、その遺体が墓に運ばれ、そこに葬られて完了となります。言わば

墓が人生というレールのターミナル駅、終着駅です。そしてその墓を塞ぐ「石」は、生と死を分ける扉のようなものです。その扉は重いのです。しかし、イエスの声に従って、今その扉である「石」が取り除けられました。それは「墓」が私たちの最終地点ではないということを語っているのではないのでしょうか。

[4] わたしこそが復活だ、命だ

「石を取り除けなさい」という言葉に対して兄弟のマルタは、「主よ、4日もたっていますから、もうにおいます」と言っています。何と現実的でしょうか。マルタは**人間の常識**としてこの言葉を語りました。どうすることもできない冷酷な現実には彼女の目は涙にくれていたでしょう。このマルタですが、少しさかのぼり、24節を見ますと、当時ユダヤ人たちが一般に信じていた死人の復活というものを彼女なりに受け止めています。けれども、それはイエス様が今もたらそうとされ死人の復活というものとは異なるのです。

23節からお読みしますと、「**イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。**」とあります。何か確信を持ち切れていないような物言いです。「わたしもみんなが言うような、やがて神の国がやってくる時の死人の復活はあるような気がするけれども、それはがいつの事になることか」というような、**言い伝えのレベル**に彼女は留まっているのだと思います。

そして、正にその時に、主イエスは決定的なことをマルタに語ったのです。25節。—「**イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」**」これまでも出てきましたイエス様の自己宣言（英語ではアイ・アム）ですが、これは、私たちを「死」から「命」へと呼び覚ます**最高峰の自己宣言**ではないのでしょうか。日本語としてはとてもおかしい言葉ですね。「わたしは復活」「わたしは命」。こんなことを言う人はいません。けれども、たった一人、主イエス・キリストだけはこの言葉を言うことがお出来になるのです。よく注意したいと思いますが、イエス様は「わたしは復活をもたらす」とか、「それを持っている」とか、「命を与える」と言っているのではなく、「わたしこそが復活だ、わたしこそが命だ」と言っているのです。ここでイエス様は、ご自分を**神の権威そのものを身に帯びた存在**として語られているのです。ですから、彼は、「死」に対して命じることが出来るのです。人間にとって絶対的な闇である「死」を駆逐する権威をお持ちの方がここにいらっしゃるのです。

そして、その方がおっしゃいました。「ラザロ、出てきなさい」（43節）。大声で叫ばれたとあります。44節。「すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て

来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。」—イエスの声に、「死」が退散したのです。「わたしこそが復活なのだ、命なのだ」とおっしゃる主イエスは、「死」の原因である「罪」を全部ご自分が背負われることによって、「死」の力を破壊されたのです。この後、ご自分が人間の身代わりになって十字架でご自分の命を投げ出されることによってです！そして、その「死」の力との戦いを終えられた方として、イエス様は文字通り復活されました。

ラザロの復活とは、イエスこそが復活であり、命そのものであることのしるしです。そしてそれは、私たちの復活の前触れです。私たちのこの地上の生命はいつか消える時がきます。でも、「本当の命」は続くのです。私たちの命はもともと神様のものだからです。やがて私たちも地上の生を終えて聴く時が来るでしょう。「ラザロ」という名を自分の名に置き換えて下さい。イエス様の呼ぶ声です。「〇〇よ、出てきなさい！」、「丸山よ、出てきなさい！」と響く大きな声です。

[結] このことを信じるか

「ウソ」に慣れてしまっている私たちです。ホントウのものをあきらめてしまい、一時しのぎの慰めを得ようと日々あくせくしているような私たちなのかも知れません。ですからそのような私たちに向かって、イエス様はこの自己宣言に続いて、敢えて問いかけるのです。—「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

あの詩人の八木重吉氏は、「信仰」という短い詩を書きました。

基督を信じて
救われるのだとおもい
ほかのことは
何もかも忘れてしまおう

復活されたイエス様は今日も私たちに言われます。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(ヨハネ 20:27)と！

信じる幸いの中に、ご一緒に歩ませて頂きましょう！

お祈りを致します。